

言語理論とその軌跡

(最終講義)

井上 和子

1 はじめに

例年のように学年末の忙しさに追われている間に、とうとう最終講義の日がやって来ました。初めは「ICUの言語学科と共に20年」という題を考えていました。しかし、ICUでは division が学科に当たり、その下にある department は制度上独立の位置を持っていません。言語学科とか英語学科という呼び名を普通使っていますが、正式の名前ではないので、「言語理論とその軌跡」というような抽象的な題にしました。しかし、これからお話しすることは、通称言語学科がどのようにして語学科の中のひとつの department として作られ、1958年から存在していた教育の大学院の中の英語教育専攻課程とどのようにドッキングして来たか、これらのプログラムの中での学生の勉学・研究と私の研究がどのような関係において結ばれて来たか、それを言語理論の軌跡の中でどのように位置づけることができるかなどをお話してみたいと思います。卒業生の方々は、私と共にそれぞれ御自身の時代を思いおこして頂ければ幸いです。私の仕事に関する話が多く、自己宣伝的な嫌いがあるかと思いますが、どうか御寛恕下さい。

2 Department of Linguistics

私は1963年4月からICUに勤め始めました。今から22年前です。私にとっては博士論文のための研究の最中でした。その時科長だったゲアハード先生、学務副学長だったクラニアズ先生は、一日も早く論文を仕上げるようにと励まして下さり、翌年1964年の4月から8月まで休暇を頂いてミシガン大学

へ論文を提出するために出かけました。8月末に無事に口述試験も終えて帰ってきましたら、以前から議論されていた語学科改編の計画が着々と進んでいて、5つのdepartmentのひとつとしてdepartment of linguisticsを作ることがほぼ決っていました。言語学者としては、ノルウェーからのヘンネ先生、デンマークからのエッケ先生が居られました。この方々の中に私も小林先生・村木先生と共に加わり、当時科長でいらっしゃった清水護先生の下でカリキュラムを作り、それぞれのコースの講義内容案を起草しました。このようにして出来た言語学のプログラムは1965年春から始められましたが、最初は必修のコースが18単位もあって、目がまわるほどの忙しさでした。

当時私はICUでの言語学科の必然性について考えたこともなく、アメリカの大学などのように当然存在すべき学科として認められたのだというくらいに考えていました。ところが今ふり返ってみますと、英語教育の大学院では当時既に言語学が重要な柱になって居り、1960年には6人の修士課程の卒業生を出しています。その中に語学科の溝口、吉岡、今田の諸先生、人文科学科の斉藤和明先生も居られます。そして私がICUに来た63年には既に18人もの英語教育専攻の修士号取得者が出ていたのです。このように大学院の英語教育のプログラムの中で言語学が本当の意味でよく生かされていたので、それに触発されて言語学の department が出来たと言ってもよいと思います。他方、この時の語学科のプログラムの編成がえで、これまで混然としていた英語学と言語学のカリキュラムが学部の段階で区別された形になりました。ですから大学院においてこの2学科が本来の姿で力を合わせて英語教育の大学院を育てて来たということになります。このような事情から私にとってICUは絶好の鍛練の場になったのです。

3 研究と教育のあゆみ

御承知かもしれませんが、私は生成文法理論の仮説を日本語によって検討することに研究の重点を置いて来ました。博士論文は初期の生成文法理論において、単一の構造に適用される変形として定式化されていた受動変形、可

能変形などは、埋めこみ構造として扱わなければならないという主張をしたものです。その後理論の変遷と共に取り上げるべき問題が次々におこって来ましたが、その間に私なりの問題提起をし続けて来ました。微力ですし、雑事に追われることも多く、決して思う存分研究に打ちこんで来たなどとは言えませんが、現在に至るまで研究中の仕事が山積してしまっていて、それらに取り組みながら、今後もこの初心を貫ぬいて行こうと思っています。

このように私の専門は理論言語学であり、主として日本語の分析を題材にして研究を続けて来ましたが、英語教育の大学院と言語学科の授業では主として英語の分析を取り上げました。私の記憶では、たゞ一度だけ一学期を通して日本語の分析を取り上げたことがあります。修士論文の指導についても次のような数字が出ています。

今年3月に修士号を取得する方々を入れて、私が単独に修士論文の指導を始めた1967年から総計61冊、クラニアンズ先生の名の下に行った66年の杉田洋さんの論文を入れると62冊の論文を見て来たこととなります。第一号は井上雅子さんと正宗美根子さんでした。これらの修士論文の中で英語を扱ったものが47冊、日英語の比較が6冊、日本語を扱ったものが9冊になっています。英語教育の大学院ですから英語を扱ったものが多いのは当然のことかもしれません。ちなみに、私は66年以来、84冊の学部学生の卒業論文の指導をしましたが、そのうち49冊が日本語を扱ったものです。このように修士論文の4/5が英語を扱っていることは、私の研究にとって重なる意味を持っているのです。

現在、言語理論の開発には、米国と欧州が主導的な役割を果たしています。残念ながら日本の学者が提唱した理論が世界を風靡したことはないのです。したがって言語理論の実証に用いられている言語は英語が多いわけです。特に生成文法理論では、英語、ドイツ語、オランダ語および種々のロマンス語の研究に重点が置かれ、日本語や中国語を題材にしたものが他の言語研究よりも目立つという状況にあります。このような理由で、私にとっては自分の研究に必要な基礎研究として英語に関する文献研究は欠かせないものです。

学部や大学院での講義は言語学の種々の分野に関するものでしたから、英語の分析を例として、少々日本語の例を加えながら理論の説明をするというのが主なやり方でした。他方、修士論文の指導について言うと、完全に give and take の形で進行し、学生が取り上げた論文を読むのに追われるというようなことも度々ありました。またこれらの修士論文の論題は言語構造の主たるものをほとんど網羅していると言ってよいと思います。かなり集約しても、名詞構造、関係詞節、形容詞、自動詞と他動詞、補文構造、時制と相、助動詞、法助動詞、動名詞、不定詞補文構造、文副詞、様態副詞、lyを伴う副詞、独立分詞構文、activo-passive、接続詞、等位接続表現、照応表現、主題化、否定、命令文、格理論といった具合に、ないものはないという有様です。学部の卒業論文でもよく似たテーマが取り上げられていますが、こちらの方には細い論題、たとえば相の中の進行相と結果状態相の「ている」のみを取り上げるというような形を取る傾向がありました。

理論の変遷との関連でこれを見ますと、67年あたりから70年代初めまでは、変形規則の定式化、特に種々の言語現象を扱う規則として移動変形、削除変形、付加変形などの定式化が進みました。規則の適用順序の問題もこの頃の花形テーマでした。また70年代初頭あたりから、句や節の内部構造を記述するための理論としての \bar{X} 理論や、意味解釈規則が問題とされ、代名詞、再帰代名詞など照応表現が取り上げられました。続いて70年代終りからは、現在の統率束縛理論が台頭しはじめました。これは変形規則に依存することをできるだけ少くして、一般的な原理とパラメータによって、言語に共通に見られる現象と言語間の差異を捉えようという、従来よりも一段高い抽象化を追求している理論です。近頃の修士論文の中にはこの方向での理論的研究が次第に増えてきました。

次に私のところで書かれた修士論文の中で9冊が日本語を、6冊が日・英語対照研究を扱っていると申しました。これらは、70年代初めまでは日本語の特殊性を扱ったもの、日・英語の差異に目を向けたものでした。ところが現在は、主題と評言、「は」と「が」、「位置格」の問題等々を日本語の特性と

して取り上げるのではなく、人間言語にそなわっている構造の可能性の中に置いて多くの言語との共通点に注目し、あるいは明確に規定されたパラメータの値の取り方の違いから来る差違として扱われるのです。すなわち、言語理論の中に対照研究が必然的に組みこまれ、われわれの日本語研究が理論の発展に以前よりも大きな役割を果し始めています。このように見ますと、ICUでの私たちの研究活動もこの言語理論の変遷の軌跡をたどったとすることができます。

ICUでの教育研究活動は指導教授と学生という二者間のものだけではありません。修士論文が提出されると早速口述試験の割り当てが決ります。84年以降はまだ整理されていませんが、それまでを集計すると他の方が指導された修士論文の口述試験に私が出たのは50冊にのぼります。他の先生方もごく稀な例外を除いて大体同じ位かこれ以上の口述審査の経験を持って居られます。論文が提出されてから口述試験までの短期間に、私たちは始めて手にする論文を数冊読まなければならないのです。この時期は実に多忙を極めるのが常ですから、決してじっくり読みこなすところまで行きませんでした。これが実により勉強になりました。

このように私たちは心を合わせて研究と教育に励んで来たのですが、ここで忘れてはならないのは、英語教育の大学院の卒業生（OB）の助力です。私が大学院に加わった当初から卒業生が学部学生の読書会の指導などをしていましたが、ここ数年来博士後期課程に進む学生が増えてきましたので、この傾向はますます盛んになって来ました。私たちの所へ持って来る前に上級生や卒業生に指導してもらおうということは決して珍しくなかったと思います。同級生間の助け合いも次第にもり上って来まして、ここ数年は論文の仕上げのタイプ打ちが間に合わない時には、数人がタイプを並べて手伝うことも珍しくなくなっています。

退官前の10年間で大学教授として過ごされたある著名な学者が、「自分なりに研究と教育の場を育てるのに10年では足りなかった」と言って居られたことがあります。私は幸い22年もICUに居ましたから、少しは有形、無形の蓄積ができたかと思えます。しかし、もし私がたゞ一人で研究・教育にかゝ

わっていたならば、決してこれほどの充実感を抱いて退職することはできなかったと思います。

この充実感に関係の先生方も卒業生、在學生の方々にも味って頂いていると思いますが、数字の面から申しますと、大学院の英語教育の専攻課程が始って以来212名の修士号取得者が出ています。全体の統計は分かりませんが、大部分の方々が英語教育に進まれ1部の方が日本語教育に進んで居られると思います。私の62名のアドヴァジャーだけを見ますと、私の知っている限り、大学教育に関係している方が37名、専任の大学教員の方が28名です。アメリカで言語学の博士号を得た方が5人ですし、現在留学中で博士号を目ざしている、あるいは間近という方が5名です。研究所や高校でよいお仕事をされている方々とICU大学院博士後期課程に在学中の数名の方を入れて62名ということになります。このパーセンテージは全卒業生にもほぼ当てはまるのではないかと思います。

このように英語教育の大学院は実に多くの優秀な教育者と研究者を世に出したことになります。学部卒業後、他の大学院へ進学したり、外国へ留学した人々も多数に上ります。これらを考えると、ICU全体として言語研究の大きな土俵を作ったことになります。これは、一朝一夕にできるものでもなければ、1人2人の人々の努力だけによってできるものでもありません。長い間には破壊的な動きが出たり、活動が停滞することもあり、先が見えなくなることもありまじょうが、ICUの英語教育大学院と言語学科の歩みは、闇の中のひとすじの道として残ることを確信しています。この道を皆さんと共に22年間歩かせて頂いたことをこの上なく幸いだったと思っています。

4 言語理論との取り組み

話が研究内容から少し外れたところへ行ってしまいましたが、このあたりで私の言語理論との取り組み方についてふれておきたいと思います。

65年に言語学のカリキュラムを発足するに当って、クランアンズ、ヘンネ、エッゲの諸先生が強く求められたことは、構造主義言語学の基礎を訓練する

ということでした。そこで講義内容（シラバス）を書いて3人の先生方に検討してもらった上でプログラムを始めたわけです。私はこの点を律義に守りとおし、講義の終りに1, 2時間割いて生成文法理論について話すぐらいに留めていました。当時言語学のセミナーは、言語学や英語学などの博士論文を提出して帰って来られた、あるいは新しく着任された先生方に担当して頂くというよい慣習がありました。残念ながら最近どうしても復活できなくなってしまった慣習のひとつです。ところで、1966年の秋には、現在カナダのプリティツシュ、コロンビア大学の教授である曾我松男先生が、インディアナ大学に博士論文を出してICUに帰って来られました。早速セミナーを開いて頂いたわけですが、これを受講していた学生たちが、どうしてこんなにすばらしい文法理論を私の講義に入れたいのかと言って来ました。この時つくづく、もう少し主体性を持って授業をしなければならないと思ったことです。65年の夏にオハイオ州立大学へ教えに行きましたが、この時にも同僚の大部分が構造主義言語学を教えていたので、学生をいたずらに混乱させることを避けて、要心深く小出しに生成文法を説明したのです。

こんなわけで、生成文法理論をかざして突進したのではなく、徐々に学生の要望に答える形でこの理論を講じるようになりました。当時、私は生成文法の概説論文や生成日本語文法について書く機会が多く、連載の論文などをあちこちに出していました。このことも影響したのか、学生の要望が次第に強くなり、修士論文も生成文法理論によるものが主流になってきました。しかし、私は構造主義理論によって言語学の手ほどきを受けたこともあって、資料に注意を払い、よい資料を掘りおこすことを学生に強くすすめていました。60年終りから70年初めの修士論文は、それらの基礎になっていた言語理論は古くなっていますが、今でも時折参照する価値のあるすぐれた資料を提示しているものが少なくありません。

60年代の終りから70年代初めまでは、Rosenbaum や梶田氏の研究に刺戟された補文構造の問題、Rossの研究に端を発した切り取り変形に対する制約、規則の適用順序、格文法、生成意味論などが注目された研究テーマでし

た。この頃に私は日本語の補文主語の削除を引きおこす要素、いわば先行詞、を機械的に指定できる仕組みを考えて“Case from a new point of view”という論文を書いています。1969年です。この年に64年に提出した博士論文が遅れに遅れてオランダのMouton社から出版されました。遅すぎてどんな批判も時期遅れという空しさはありましたが、私自身69年が研究のひとつのくぎりになったという気がしています。理由の1つには、この年に、1964年に出版されたEmmon Bachの*Introduction to Transformational Grammars*を翻訳し、出版したことがあります。原著から5年遅れた出版であることが、自分の経験から著者に気の毒でなりません。そこで、64年から69年へのギャップを埋めるために、型破りでしたが124頁にも上る訳者注を書きそえました。

当時大学紛争の嵐が吹き荒れていまして、ICUも1969年の2月から9月まで大学が閉鎖状態でした。そこで三鷹市の図書館や、杉並区の集会所などで学生たちと読書会をしたり、論文指導をしたりしました。その間に多くのつらい思いを経験しましたが、唯一の精神衛生法として、沢山の本を読み、かなりの数の書評を書きました。Hockettの編集した*Bloomfield Anthology*やDineenの*Introduction to Linguistics*など、当時の私の研究に直接関係のなかった大著を次々に手がけて、現実のみじめさを解消していたようです。この活動でかなり巾広く言語学を見直し、その中に生成文法と自分の研究を位置づけることができたと思います。

次に69年秋からの三宅学長代行の執行部で教養学部長のワース先生のお手伝いを72年春までするという大変な時期がやって来ました。家へは寝に帰るだけのような日課が半年ほど続いて、徐々に大学活動が軌道に乗りました。この頃は全く研究どころではなかったのですが、この間に10冊ほどの修士論文を見ています。この時の学生には気の毒なことをしたと今だに悔まれます。この頃には学内・外の方々に手伝って頂いた点多かったと記憶しています。中でも当時東大の音声言語研究施設長だった藤村靖先生、亡くなった原田信一さんには、種々の形でお世話になりました。

72年の春に教養学部副部長の職を降りて1年あまり、遅れを取りもどしながら、かなりがんばって、73年には8冊の修士論文と、11冊の学部卒業論文を見えています。つゞいて73年秋から74年5月の終わりまでMITで研究休暇を過しましたが、MITの授業に出るのが楽しみで、自分の仕事に精を出すのは週末というパターンで暮しました。この時に書き上げたのが、日本語の再帰形式の解釈理論でした。この論文もできる限りよい生の資料を集め、ボストン在住の日本人の方々に例文の文法性や解釈の可能性について検討して頂き、念を入れました。これは76年に出版されたAcademic Pressの*Syntax and Semantics* 第5巻に収録されています。今から3年前にオランダの言語学者コスター氏がこの論文を読み非常に役に立ったと言って、これを引用した論文を送ってくれました。規則や理論は古くなっても、一定の理論に基づいて丹念に集めた資料の大切さを思い知らされたことでした。

74年春学期の終わりにMITから帰り75年春から、語学科の科長の仕事が始まりました。いかに誠意をもって身を削る努力をしても喜んでもらえることの少い激職でした。しかし他方、大学紛争以来MITでの休暇中をも通して手がけていた研究がかなりたまっていましたので、76年に『変形文法と日本語』の上下二巻を出版しました。この間、理論の流れとして、変形規則が次々に整理されて行く中で、日本語の側からこれを見ると、どうしても変形規則は不要だと結論せざるを得なくなり、『日本語に変形は必要か』という題で関連雑誌に連載を始め、かなりの議論に火をつけることができました。『変形は必要だ』という原田信一さんの最後の論文の中に、日本語の自由語順を扱った「かきませ規則」が必要だという論点があります。現在最先端の統率束縛理論の中で、この規則を日本語の唯一の移動変形とすべきであるとの提案が出され、感慨新たなものがあります。78年には、上記の連載を大巾に改訂して『日本語の文法規則』を出版しました。しかし、語学科科長の激職にありながら、無理をして仕事をしていたので、母の病気の進行に気づかず、この年の秋に母を亡くしました。私は根をつめて物を書き上げますが、活字になってしまうと暫く見るのもいやという時期が来ます。特にこの本は不幸の

引き金になったような気がして、その後数年全く手をつけないまゝになっています。

このように落ちこんでいた時に、卒業生や同僚の皆様の多大の御努力で、79年4月には還歴記念パーティをして頂き、7月には立派な記念論文集を刊行して頂きました。私にとって感激と共に皆様の御厚情を身にしみて思い出す記念すべき出来ごとでした。その時に中心的役割を果たされた升川潔氏が数年後に他界されようとは、誰にも思いも及ばないことでした。

78年の『日本語の文法規則』と前後して、文の文法から談話文法へ目を向けなければ説明できない文構造の問題があることに注目しはじめました。

「は」と「が」の問題はその1例です。他方変形を設定しない文法として語彙文法を書き始めました。Farmer, Miyagawa, Ostlerなどの研究に触発され、年来の主張を具体化するわく組みとして採用した文法です。これは、81年の韓国での国際会議議事録や、83年にまとめた『日本語の基本構造』に収録されています。これらはまだ手直しをする必要がありますが、統語構造と語彙構造の接点の問題を明らかにするために更に研究を進めるべき面白い分野だと思っています。

Chomsky は70年に入ってから、拡大標準理論、後期拡大標準理論と次第に理論を手直しし、精密化しましたが、他方で彼の言語理論の哲学的側面をまとめた著作を2冊、この頃に出版しています。1つは、1975年の *Reflections on Language*、もう1つは80年の *Rules and Representations* です。この2冊は心理言語学者の神尾昭雄氏、言語哲学者の西山佑司氏と共訳の形で出版しましたが、前者の下訳をして下さった、大塚達雄、河野武、山田洋の各氏、後者の藤田悟、鷲尾龍一、川崎典子、福井直樹の卒業生諸氏と共に大いに学ぶところがありました。なお今年5月に出版された研究社の『現代の英文法』の中の『名詞』の巻は、13年がりの仕事ですが、やはり英語教育大学院の卒業生の山田洋、河野武、成田一の諸氏との共著出版物です。

6年間の科長時代を終え、81年春から研究休暇を頂き、韓国の国際会議、米国ミドルベリーでの談話文法のシンポジウムに出席した後、秋から再び

MITとハーバードに出かけ、秋学期を紅葉の美しいケンブリッジで過しました。帰国後、82年の国際言語学者会議の事務局長として、おびただしい数の応募論文の要約を読んだり、国際会議に向けての準備に残りの研究休暇期間を過しました。82年夏のこの会議では、若い学者による working groups が沢山でき、日本の若い人々が中心的な役割を果たしましたが、特にICUの学生や卒業生の活躍が目立ちました。これもICUを一つの足がかりとして学内・外の多くの学者・学生が協力して言語学の土俵作りを行ってきたことの成果の現れだと思えます。この時から毎年ICUの言語学研究会に前後して、欧米の若い研究者を招いて講座を開いて来ましたが、国際会議で燃え上った火種を消すまいとの努力のひとつです。

81年にChomskyの *Lectures on Government and Binding* という統率束縛理論の最初のまとめとも言うべき本が出ました。これに先がける論文も数多く、大学院生の多くが79年あたりからこの方面の研究に取りかゝって来ました。81年あたりから本格的な統率束縛 (GB) 理論による修士論文が出はじめています。この間の私の研究はCase Marking and Property Reading としてまとめ、昨年カナダ、ブリティッシュ・コロンビア大学での Nitobe-Ohira Memorial Conference で読みました。この論文は格助詞の付与が文の中の他の要素によって制約を受けていることを示そうとしたものです。昨年秋の日本英語学会の記念講演で取り上げた implied agent の問題、つまり表現されていない動作主が構造による規則的な制約の中で意味解釈に影響するという仮説を日本語にあてはめて研究しています。いずれもGB理論において重要な役割を果たしている格理論 (Case Theory) と主題理論 (Theta Theory) とを広い観点から見ようとしたものです。

以上のように私個人と学生を中心にした研究が私の仕事の主流ですが、学内・外の学者と協力研究ができたことも忘れてはなりません。特に77年～80年、82年～85年の文部省科学研究費補助金による特定研究では、言語学だけでなく、心理学、情報学、工学、数学などの方々と共同研究をしましたから、研究目標も方法論も言語学独自のものとうまく一致するというわけには

行きません。数量的処理に関心が集中したりして違和感を感じることもありました。違った目で言語現象を見る訓練になったと思います。実験計画や数量処理にいま一步という面もありましたが、私も日本語の談話構造と文構造が談話の聞き取り理解に及ぼす影響について結論を得ることができました。日本語の談話の冒頭に多く用いられる非制限用法の関係詞節は意味理解においては無視され、主節に盛られた情報の方が保持されるという実験結果が出たのです。この研究には現在の大学院生の力強い協力が得られました。このほかにも科学研究費に関する事務などに卒業生や院生からの巾広い協力が得られたことが、大きな班の運営に貢献したことは言うまでもありません。最後に学外との協力関係については、83年4月から今年3月末まで日本言語学会の会長を勤め、村木先生に事務局長の役を引き受けて頂いて、学会活動を続けました。ICUに事務局を置いて頂いたので何かと御迷惑をおかけしたかと思いません。

最後に私の描いているこれからの研究の方向について少しお話ししましょう。生成文法では、資料から言語構造を発見する方法論を言語理論と考えることは誤りであると言います。資料も構造主義の言語学者が主張したような客観的手法で収集した話しことばの記録などに限定しません。書きことばであろうと話しことばであろうと、言語学者の直観であろうとかまわないのです。このような一次資料にたいする見方は、資料はどんなものでもよい、資料は軽視してよいと考えているのではありません。資料が言語構造をそのまま反映しているわけではありませんから、どのような資料も間接的な資料にすぎません。間接的な資料をもとにして立てた仮説の予測するところに従って新しい資料を探して仮説を検討して行かなければならないわけです。しかし、言語学者が自分の仮説に都合のよいように作り出した資料のみの検討では、真の客観的検証とは言えません。理論とは離れて無意識で使われた資料が仮説の予測するところに合っているのはじめて、強力な支持が得られたと言えます。心理言語学の実験も厳密な方法で良質の資料を得るための努力のひとつです。しかし、成人の言語意識には余りに多くの要因が含まれていて、有効な心理

実験を計画することが困難です。そこで私は今少し資料に関する隘路を切り開く努力をしてみたいと思っています。具体的には日本語を学ぶ外国人の誤りの分析を大がかりに行って、GB理論での議論の立てかたの筋道を洗い直してみたいと思うのです。これが現在切実に望まれている研究方向でもあると思います。大きな考え方の転換はできなくても、これまで不安定であった部分に何らかの肉づけができればと思っています。これまでの仕事の改訂をもなるべく早く手がけたいし、これからも雑事がなくなるという保証はありませんが、できるだけ精神力を集中して、新しい洞察を得ることを目標に進んで行きたいと思っています。

あと3週間足らずでICUを去り、母校の津田塾大学へ帰りますが、皆様と共にICUで学んだものは、これからの生涯のよりどころとして私の中に生き続けることと思います。今後とも学問などを通して皆様との交友を長く続けて頂けるよう心から願って居ります。

参考文献

- Bach, Emmon. 1964. *An Introduction to Transformational Grammars*. Holt, Rinehart and Winston.
- 井上和子（訳）1969.『変形文法』大修館
- Bedell, George, Eichi Kobayashi, and Masatake Muraki. (eds.) 1979. *Explorations in Linguistics: Papers in Honor of Kazuko Inoue*. 研究社
- Chomsky, Noam. 1975. *Reflections on Language*. Pantheon Books.
- 井上和子, 神尾昭雄, 西山佑司（訳）1979.『言語論』大修館
- Chomsky, Noam. 1980. *Rules and Representations*. Columbia University Press.
- 井上和子, 神尾昭雄, 西山佑司（訳）1980.『ことばと認識』大修館
- Chomsky, Noam. 1981. *Lectures on Government and Binding*. Foris Publications.

- Dinneen, Francis P. 1967. *An Introduction to General Linguistics*. Holt, Rinehart and Winston.
- Farmer, Ann K. 1980. *On the Interaction of Morphology and Syntax*. Ph. D. dissertation. MIT
- Fillmore, Charles J. 1968. "The Case for Case," in Bach and Harms (eds.) *Universals in Linguistic Theory*. Holt, Rinehart and Winston 1-88
- Hockett, Charles F. (ed.) 1970. *Leonard Bloomfield Anthology*. Indiana University Press.
- Inoue, Kazuko. 1969a. *A Study of Japanese Syntax*. Mouton.
- _____ 1969b. "Case from a new point of view," in Jakobson and Kawamoto (eds.) *Studies in General and Oriental Linguistics*. TEC. 246-280
- _____ 1976. "Reflexivization: An Interpretive Approach," in Shibatani (ed.) *Syntax and Semantics*, Vol. 5. Academic Press. 117-200
- 井上和子 1976. 『変形文法と日本語, 上, 統語構造を中心に』大修館
『変形文法と日本語, 下, 意味解釈を中心に』大修館
- _____ 1978. 『日本語の文法規則』大修館
- Inoue, Kazuko. 1982a. "An interface of syntax, semantics and discourse structures," *Lingua* Vol. 57, 117-200
- _____ 1982b. "Transformational vs. Lexical Analysis of Japanese Complex Predicates," in the Linguistic Society of Korea (ed.) *Linguistics in the Morning Calm: Selected Papers from SICOL 1981*, 380-412
- 井上和子 1983. 「文-文法と談話文法の接点」『言語研究』Vol. 84, 18-45
- Inoue, Kazuko. 1985. "Case Marking and Property Reading," in

井上和子（編）『明確で論理的な日本語の表現』 67-109

- Kajita, Masaru. 1968. *A Generative-Transformational Study of Semi-Auxiliaries in Present-day American English*. 三省堂
- Miyagawa, Shigeru. 1980. *Complex Verbs and the Lexicon*. Ph. D. dissertation. The University of Arizona
- Ostler, N.D.M. 1979. *Case-Linking: A Theory of Case and Verb Diathesis Applied to Classical Sanskrit*. Ph. D. dissertation. MIT
- Rosenbaum, Peter S. 1969. *The Grammar of English Predicate Completion Constructions*. The MIT Press
- 安井美代子, 熊谷滋子, 井上和子, 1985. 「談話における文構造の働き」井上和子（編）『明確で論理的な日本語の表現』 5-27